

郡上踊り

人生は人と書物と場所との出会いを大切にという教訓を若いころ教えられ、実践の中に生かしてきた。郡上踊りに深い思いを感じたのは清水正光さんとの出会いであった。鮎釣りの名人と友人に紹介されたのだが清水さんは郡上踊り新正春駒会を主宰されていた。80歳と言っておられたが実に若々しく宴席へ三味線を持ってこられ、かわさき・春駒・三百など旅情溢れる郡上節を披露、それぞれの唄の背景と意味の解説を聞いた。座敷ではあったが、奥美濃の山々と清流のせせらぎと山奥に暮らす民の生活の喜怒哀楽が溢れ、日本人の遺伝子が持つふるさとの琴線に触れる民謡の力を知った。郡上踊りは日本三大盆踊りであるが、三大民謡でもある。

郡上市は平成の合併で7町村が一市になり誕生。最近話題の2025年の人口動態を予測した日本創生会議の報告書によると消滅可能都市とみなされているが、この町に来てみると無機質な中央官僚の作文だと知る。

踊りの中心地八幡^{はちまん}は奥美濃の小京都と呼ばれ、木造の旧八幡役場などを中心に古い町並みの残る美しいスポットだ。かねてからの私の持論はコミュニティが祭を育み、祭がコミュニティを支えるという関係である。郡上踊りはこの深い山並みと長良川の清流に囲まれた八幡の町並みなくしては成立しえない。

さて盆踊りについてだ。正月とお盆は日本人の最大宗教行事である。お盆は仏教のご先祖を迎える行事盂蘭盆会^{うらぼんえ}から来たものだが、もともと釈迦が説く仏教は人間の諸欲を断つことによって救済される宗教であり先祖崇拜の教えはない。仏教は日本に伝わり先祖の霊を貴ぶ古神道と一体化し、時代と共に神仏習合日本特有の宗教観のお盆を作り上げた。今の日本で全国的に展開される盆踊りにはなんら宗教的なものはないというものの、通奏低音として縄文のアミニズムと渡来宗教の仏教の響きが聞こえてくる。

郡上踊りのスケールは大きい。七月中旬から九月下旬まで32夜続き、特に8月13日から16日までの3日間は盂蘭盆会と称して未明まで夜を徹して30万余の観光客が踊りに熱狂する。木造2層寺社風構造の屋形を組み、2階で三味線・太鼓・笛をお囃子に唄・掛け声の人たちの演奏で、踊りの振り付けは単純なものだから、同じアホなら踊らなソソソソと観光客も踊り出す。3日3晩踊り狂うという事はいったい何なんだろう。現代はすべての価値観が数値で測られるから効率やスピードが求められる。町の価値でも人口が多いほうが上だ。ところが量から質の価値に考えを変えると途端にものが見えてくる。鄙びたお囃子、何となくなめかしい浴衣姿、踊りの時わざと鳴らす乾いた下駄の音、周りの黒々とした山々と満点の星、見知らぬ人との出会い、それらは時間を止めて非日常の興奮をもたらす。そこは祭特有の神が下りてくる時間帯でもある。

